



オランダ製 ヴィップ型風車『ヴリンスキヤップ』(チューリップ四季彩館前広場にて)

チューリップ
四季だより

2001. 春号
Vol.18

『チューリップと私』

園芸研究家 江尻 光一

チューリップと私との出会いはもう七十年少し前になる。私が生まれた中山（競馬場のある街）の家には小さな花壇があり、毎年春になると三十本位のチューリップの花が開き、その美しさを競っていた。当時はこうした家庭の園芸は一部でしか行われていなかったようで、近所でも珍しく思われていたが、すべて父の趣味だった。大正十年ごろから、父は七つほどの国より、婦人服の服地を輸入し、これを東京のデパートに納める仕事をしていたが、その頃は花への関心はなかったそうだ。大正十五年に私は生まれているが、その少し前、取引先のオランダの商社からチューリップのトップサイズの球根を送られ、どうしたらよいか困ったそうだった。街の本屋に行き、やっと園芸の本を手に入れ、これを見てチューリップを植えた所、翌春、大輪の花が開きびっくりした、と言っていた。父は煙草好きだったが、あの頃では最も長かった、敷島、とか、朝

日、といった煙草が、開花したチューリップの中にすっぽりと入ったそうだった。公園で見るチューリップの花とあまりにもサイズが違うのでびっくりしたようだった。これが一つのきっかけになり、父は日曜園芸家になったのだが、以後も一二年毎に先方から球根を送ってもらい、自分で小花壇に植え付けていた、という。私が三、四歳の頃から見たのも、こうした経過で入手したチューリップの花だった。子供心に、蕾が出てくると開花が待ちどおしくなり、開きはじめれば喜び、散ればつまらなくなる思いをチューリップで味わったものだった。

後年、私が園芸という世界に入った遠因は、どうもチューリップの花との出会いのように思える。

少し大きくなって小学校の頃になると、赤花の所に白い不規則な斑が入ったり、黄花にはあまり入らなかったり、といった花色の変化が、どうして起こったのか解らず不思議に



▲1932年5月 父が撮ってくれたもの。私が5歳の時のチューリップ関係のたった一枚の写真です。

思ったものだった。

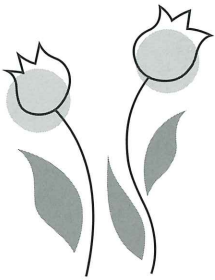
チューリップについて次に思い出されるのは昭和十九年の初冬の夜の体験だ。場所はぼろ温室の中、そして薪を燃やしていた、ダルマストープの上の鉄鍋の中のチューリップ。

この年はもう敗戦のきざしが見え、物資は不足してきており、食料も決められた量しか手に入らず、大変な事態だった。花づくりは国賊とまで言われ、チューリップづくりも間々ならず、止むを得ずに、大きい球根のみ十〜二十球を探し出し、人目につきにくい所に植え付け、残りの小球はどうしたものかと放っておいた。少しづつしなびてくる球根にさわりながら、困惑していた。

こんな折り、ふと眼にしたのが、新聞の片隅に出ていた新潟県でのチューリップの話だった。球根の残りを利用し、これを焙って乾燥させて粉末にし、その頃もう少なくなっていたコーヒーにこれをまぜて飲んでいる、という記事だった。たしか代用コーヒーという活字を使っていたように思った。この記事を見た直後、急にチューリップを食べてみようと考え出していた。粉末にして飲んでみるのならば、食べても害はないだろうと考え、ぼろ温室の片隅にある小さい球根を引っぱり出し、これを鉄鍋の中に入れ、ダルマストープの上にのせて、煎ってみたものだった。少し皮も焦げ、さわってみるとやわ

らかくなったので、早速口にしてみた。百合の食味とは異なっているが、すきつ腹には大変おいしく感じ、どんどん食べ出した。その体験を両親に伝えた所、母から、ほうろくで行うともっとおいしくなるだろうと言われ、翌日はほうろくを使って煎ってみたが、焦げ方がとても良く、食味はよかった。とは言っても数はたかが知れているので数日で食べつくしたが、親子六人で少しづつ分けあいたチューリップが忘れられない思い出となつていく。昭和二十年九月以降今日まで、私は「園芸」という分野ですごしてきたが、花づくりへの道の源は、幼かった頃に見たチューリップの花色と、ひもじい思いの時に食べた球根の味にあるように思う。だから秋には昔を思い出して、チューリップの球根を握ってみていく。

※ほうろく…素焼きの平たい土鍋。火にかけて食品を炒ったり蒸し焼きにしたりするのに用いる。



略歴

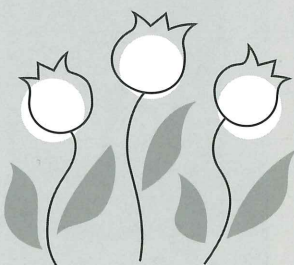
えじり こういち



- 一九二六年 千葉県に生まれる。
- 一九四五年 須和田農園営業開始にあたり作業に従事。
- 一九四八年 東京農業大学卒業。須和田農園自営開始。洋蘭の栽培及び品種改良に従事。
- 一九六一年 NHK「趣味の園芸」に出演、現在に至る。
- 一九七〇年 日本洋蘭農業協同組合理事（一九九八年より参事）、及び正審査員。
- 一九七八年〜一九九九年 NHKラジオ「園芸相談」レギュラー講師。
- 一九八三年 東京都緑の倍增推進協議会委員。（五期）
- 一九八七年 第十二回世界蘭会議展覧会（向ヶ丘）にて、金メダル受賞。
- 一九九一年 世界らん展日本大賞1991（東京ドーム）にて、「日本大賞」受賞。

- 一九九三年 第十四回世界蘭会議展覧会（英国、グラスゴー）にて、銀メダル受賞。
- 一九九四年 世界らん展日本大賞1994にて、再度「日本大賞」を受賞。
- 一九九五年 第四十六回日本放送協会放送文化賞受賞
- 一九九七年 第一回市川市民文化賞奨励賞受賞
- 一九九九年 第一回「みどりの日」自然環境功労者大臣表彰受賞
- 一九四八年より行われている日本洋蘭農業協同組合主催の洋蘭展にて、農林水産大臣賞を七回受賞。
- 二〇〇一年四月 東京農業大学客員教授

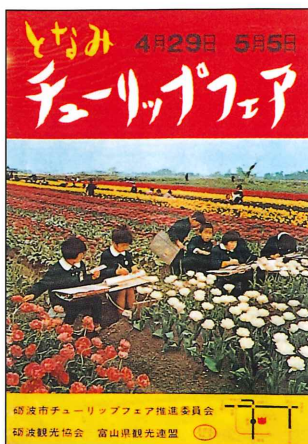
著書 「わたしの洋蘭物語」（NHK出版協会）、「失敗しない園芸のコツ」（主婦の友社）、「初めての洋ラン作り」（主婦と生活社）、ほか多数。



ポスターで見る

チューリップフェア いま・むかし

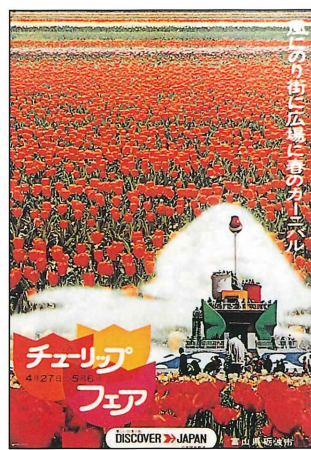
今年で第五十回を数える「となみチューリップフェア」。その五十年の歴史をポスターで紹介します。また、フェア期間中には、会場内でチューリップフェアポスター展を開催しました。



第13回 昭和39年(1964) 推定



第24回 昭和50年(1975)



第23回 昭和49年(1974)



第22回 昭和48年(1973)



第19回 昭和45年(1970)



第30回 昭和56年(1981)



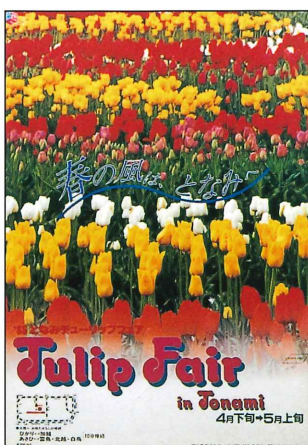
第29回 昭和55年(1980)



第28回 昭和54年(1979)



第26回 昭和52年(1977)



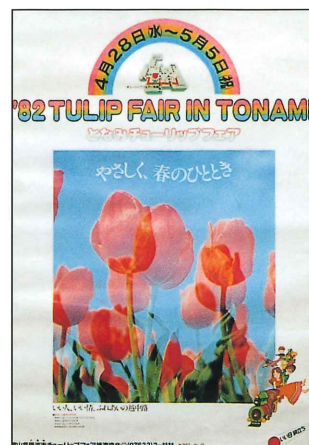
第34回 昭和60年(1985)



第33回 昭和59年(1984)



第32回 昭和58年(1983)



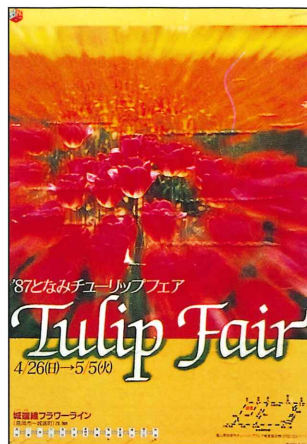
第31回 昭和57年(1982)



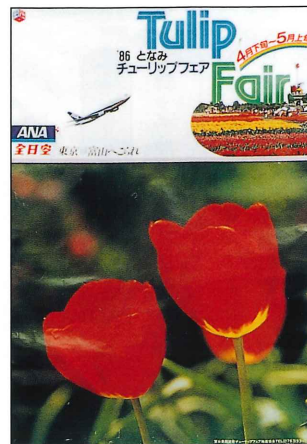
第38回 平成元年(1989)



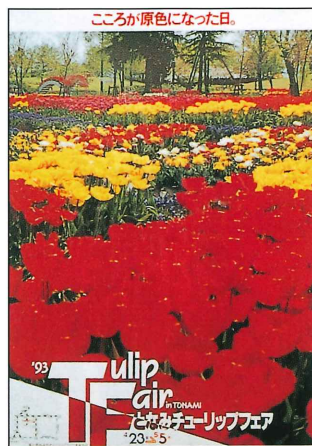
第37回 昭和63年(1988)



第36回 昭和62年(1987)



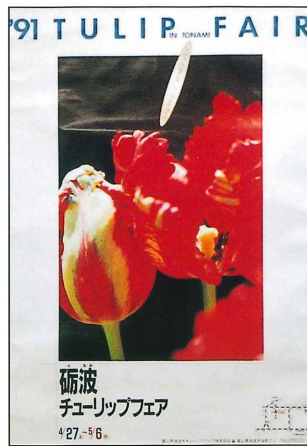
第35回 昭和61年(1986)



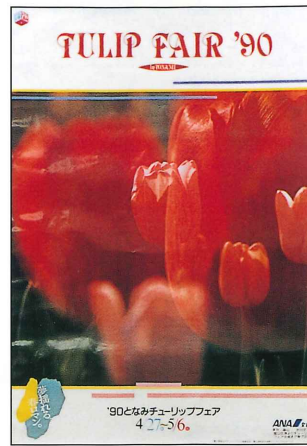
第42回 平成5年(1993)



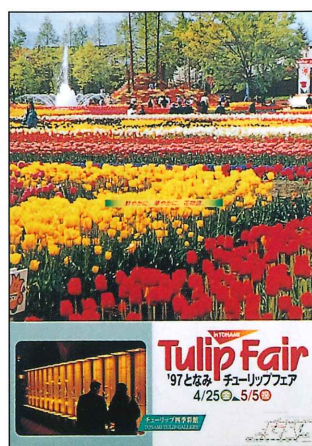
第41回 平成4年(1992)



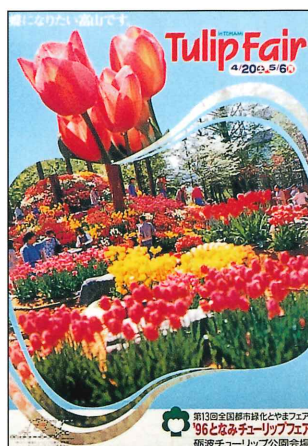
第40回 平成3年(1991)



第39回 平成2年(1990)



第46回 平成9年(1997)



第45回 平成8年(1996)



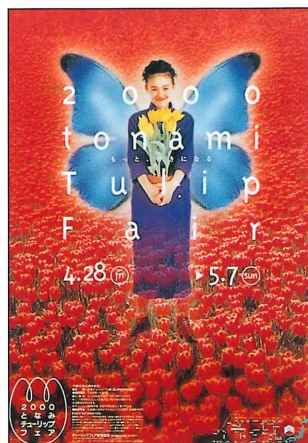
第44回 平成7年(1995)



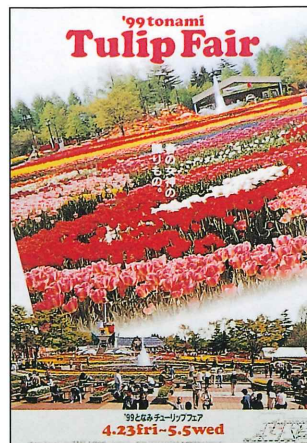
第43回 平成6年(1994)



第50回 平成13年(2001)



第49回 平成12年(2000)



第48回 平成11年(1999)



第47回 平成10年(1998)

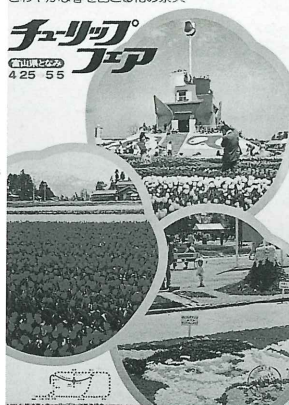
となみチューリップフェア五十回記念

チューリップフェア五十年史(後編)

第二十五回(昭和五十一年)

▼第25回ポスター

さわやかな春を色どる花の祭典



砺波野の春を彩るチューリップフェアは、県内外に広く知られたるようになった。この年は開催期間が長かったこともあって、入場者数は三

年代

1976

十三万八千五百人。過去五年間の平均入場者数は三十万人というビックイイベントであった。

●チューリップ公園総合計画

チューリップを核として市民が四季を通して楽しめる都市公園の整備が、この年から十九年計画ではじまった。

●旧中島家を移築

砺波地方の典型的な民家「旧中島家」をチューリップ公園の中に移築した。古い暮らしをしのぶ生活用品や農機具を展示している。

第二十八回(昭和五十四年)

郷土の歴史や民俗資料を集めた郷土資料館が、チューリップ公園の中にできる。明治四十二年(一九〇九年)に建築された旧中越銀行を移築したものである。フェア期間中には、特別展、企画展を開催している。

第三十一回(昭和五十七年)

チューリップ公園の拡張工事は順調にすすみ、この年には、野外ステージ、円形噴水、お祭り広場ができ、また隣接して文化会館も完成した。開園を祝って、オープニングには県警音楽隊が公園内を演奏しながら一周した。

●新公園建設

昭和五十一年、都市公園としての建設が計画されたチューリップ公園は、同五十八年に、砺波園芸分場の五郎丸地区への移転が決まり、計画は一気にすすんだ。

チューリップタワーを中心に花壇とお祭り広場「フェアゾーン」、移築した旧中越銀行本店、旧中島家とともに市指定文化財がある「郷土ゾーン」、池やショウブ園、芝山が広がる「憩いのゾーン」、蒸気機関車弁慶号、クラシック消防自動車チャンドラ号、遊具を設置した「子供ゾーン」などが造成された。チューリップフェアの主会場にふさわしい五・四ヘクタールの広大な公園は、十年の歳月をかけて整備がすすめられた。

1983

第三十二回(昭和五十八年)

富山県置県百年記念いきいき観光キャンペーンが全国に向けて展開された年である。それに連携して、チューリップフェアも広域観光の宣伝活動を積極的にすすめた。

五月一日から三日までは開演を二時間延長してナイター開放が行われた。水銀灯五基でチューリップの花を照らした効果は抜群で、日中とはまた違ったムードをつくり、レーザー光線が彩る花たちに歓声があがった。

●フラワー都市交流協議会発足

山形県長井市(アヤメ)、静岡県下田市(スイセン)、鹿児島県和泊町(ユリ)、そして砺波市(チューリップ)の四都市が、花を通して観光や産業、経済発展の交流を深めるため「フラワー都市交流協議会」を発足させた。

●チューリップ花の浮島

デンマークのチボリ公園と砺波、世界一を所かかないという水に浮かぶチューリップが考案された。池に浮かべた発泡スチロールに咲く水栽培のチューリップ。その色とりどりの花が水を漂う様が、観光客の目を引いた。

●県内最古の消防自動車「チャンドラ号」



英国製の消防自動車「チャンドラ号」は県内最古のもので、三十年以上の間活躍した。その後保存会によって修理され、昭和五十八年、チューリップ公園内の展示館に設置された。

1989

第三十八回(平成元年)

暖冬で積雪が少なく、三月には芽を伸ばしてしまつた球根に遮光ネットを張り、開花を遅らせることにしたが、それでも早咲きは止められず、予定したフェア開催を二週間繰り上げた。

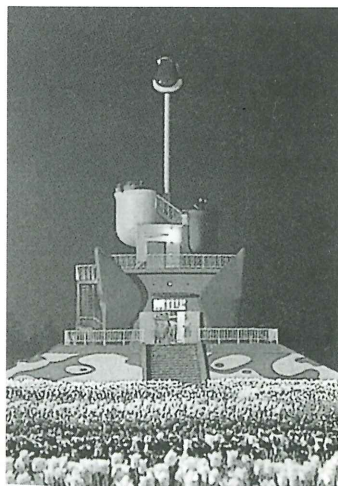
花盛りの砺波平野を満喫する「ヘリコプター遊覧飛行」は大人気で、子供から大人まで順番待ちの列が続いた。

●万里のチューリップ

エレガガーデンからチューリップ公園東門につながるフラワーロードに長さ百メートルにわたってチューリップの絵模様が完成した。砺波商工会議所青年部が企画したもので、観光客にも参加を呼びかけ、花首二十万個を使って完成させた。親子連れと一緒に花を挿し、記念写真を撮る姿も見受けられ、大変好評であった。

●トルコ・ヤロバ市と国際交流

チューリップの原産国の一つ、トルコ・ヤロバ市と姉妹都市の調印を行い、花と緑の国際交流が始まった。



▲タワーが浮かびあがるナイター



冬の間から、チューリップフェアの開催に合わせて開花調整を行い、オープニングには色鮮やかな花のじゅうたんで観光客を迎えることができた。期間中は好天が続き、入場者は過去最高の四十八万九千人を数えた。

小杉町太閤山ランドで開かれた、シャパンエキスポ富山に呼応して設けたワールドバザールはたくさんの人で賑わった。

●チューリップ公園の新しいシンボル
「ヤロバの泉」
姉妹都市トルコ共和国、ヤロバ市から贈られたタイルが取り付けられている。

●五連水車
砺波地方は、らせん水車の発祥地。それを再現する日本初の五連水車が、チューリップ公園隣の水車苑に登場した。大きいものは、直径五・五メートルで力強く水をくみ上げる。美しい水と緑豊かな砺波を象徴する五連水車は、市民や観光客の憩いのスポットになった。



▲大空に花咲く熱気球

●ボランティアの活躍
会期中は延べ五百人以上のボランティアが活躍した。特に市内三中学校の生徒たちはアンケート集計や清掃に疾走した。

花の開花をチューリップフェア期間に合わせるため、晩生種への品種変更や、遮光ネット、散水などの調整のおかげで開会まで花はちょうど満開で、観光客に十分楽しんでいただけた。フェアとなった。植替用に十萬本の花は、ボリユームある会場構成に役立ち、入場者に好評であった。チューリップタワーからの眺望をお年寄りや車椅子の方にも楽しめるようにとバリアフリー化したメルヘンスロープが作られた。

第四十八回(平成十一年)

●開花が早まる
暖冬と好天続きでチューリップの開花が早まるというアクシデントがあった。遮光ネットで覆い、フェア会期前の四月二十三日に三萬本、二十八日に八萬本の植替を行った。後半にはほとんどが散ってしまった。その対応として、マリーゴールドなどの草花五萬本を植え、さらに五月一日から入場料を二百円にした。

年代 1992

冬の間から、チューリップフェアの開催に合わせて開花調整を行い、オープニングには色鮮やかな花のじゅうたんで観光客を迎えることができた。期間中は好天が続き、入場者は過去最高の四十八万九千人を数えた。

小杉町太閤山ランドで開かれた、シャパンエキスポ富山に呼応して設けたワールドバザールはたくさんの人で賑わった。

●チューリップ公園の新しいシンボル
「ヤロバの泉」
姉妹都市トルコ共和国、ヤロバ市から贈られたタイルが取り付けられている。

●五連水車
砺波地方は、らせん水車の発祥地。それを再現する日本初の五連水車が、チューリップ公園隣の水車苑に登場した。大きいものは、直径五・五メートルで力強く水をくみ上げる。美しい水と緑豊かな砺波を象徴する五連水車は、市民や観光客の憩いのスポットになった。

第四十一回(平成四年)

1996

●チューリップ四季彩館完成
一年を通してチューリップを見ることができ、また、世界中の情報が得られる施設として、チューリップ四季彩館が完成した。

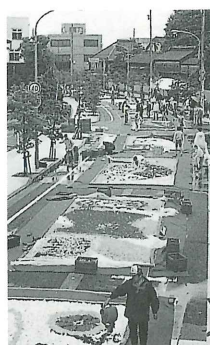
●カナディアン・チューリップフェスティバル交流
国際親善協会を介して、カナディアン・チューリップ・フェスティバルとの交流がはじまり、ドナ・ホルトン会長とミッシェル・ゴルチエ氏が砺波を訪れ、五月には岡部市長ら七名がカナダを視察。その後も毎年、市内の団体や子供たちの交流が続いている。

第十三回全国都市緑化とやまフェアのオープニングを飾って開催されたチューリップフェアは、十七日間にわたる長いものであった。四月下旬になって降った雪で開花は遅れたが、五月に入るとチューリップは満開となった。

●チューリップ公園に熱気球の花
チューリップフェアの開催を前に、地元の熱気球同好会「雲気球」をはじめ、全国から集まった十二基の熱気球がチューリップ公園上空を舞った。

第四十五回(平成八年)

1996



▲タピ・ドゥ・フルー

●タピ・ドゥ・フルー
市民が参加してチューリップフェアを盛り上げ、砺波商店街を活性化させようと、花ひらで地上絵を作る、タピ・ドゥ・フルー砺波商工会議所青年部主催が開催された。それぞれの団体が工夫を凝らした絵は、町の通りに新しい世界を作り出した。

第四十七回(平成十年)

1999

2001

●チューリップ畑の拡張
メイン会場をチューリップ公園に、総合運動公園付近の四・六ヘクタールの大型観光ほ場と、市街地のタピ・ドゥ・フルー会場を第二会場と位置づけ、シャトルバスを運行。さまざまな表情のチューリップをたっぷり楽しめるものとなった。

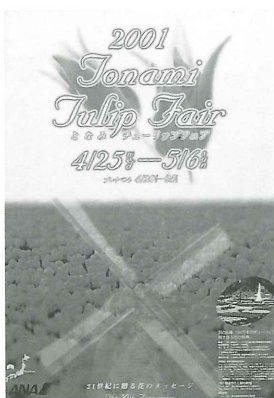
●フレイベント開催
従来からフェア会期前にも多くの人が咲き始めたチューリップを楽しむに公園を訪れていた。そこで今年は、フレイベントとしてチューリップ四季彩館を中心に四月二十日から公開。チューリップの砺波を核に、富山県内の観光地との連携を図り、充実した周遊観光を提案する。

●第五十回記念事業
四月二十四日には、砺波市と友好交流を続けているトルコ、オランダ、カナダ、中国などの代表が集まりチューリップサミットを開催し、国際親善を深めた。

富山県農業試験場砺波園芸分場を開放し、栽培されていた数百品種のチューリップを一般の人にも楽しんでもらおうと始まったチューリップフェア。職員手づくりの素朴な催しは、半世紀を経て、四十万以上の人々を迎えるビッグイベントとなった。

二十世紀の幕開けを飾る第五十回チューリップフェアが四月二十五日より開催。美しく咲き競う花が、人の心と心をつなぎ、世界へ、未来へ。チューリップを通して広がる優しさ。それがチューリップフェアを支えてきた人たち、そして、砺波市民の願いである。

第五十回(平成十三年)



▶第50回ポスター

チューリップ四季彩館では「世界のチューリップ展」を開催した他、四季彩館前には、高さ八メートルの壮大なオランダ風車が完成した。



◇表紙の写真◇

オランダ製 ヴィップ型風車

『DE VRIENDSCHAP／ヴリンスキップ(友情)』

砺波市とオランダ王国リッセ市が、姉妹都市となった年と同じ1992年(平成4年)に制作された、「ヴィップ」型というオランダでも歴史のある“水汲み用風車”。

日蘭交流400周年とチューリップフェアの第50回を記念して、オランダよりチューリップ四季彩館前広場に移設した。



チューリップ四季彩館
TONAMI TULIP GALLERY

(財)砺波市花と緑の財団

〒939-1381 砺波市中村100-1 ☎(0763)-33-7716 FAX(0763)-33-0090

URL <http://www.city.tonami.toyama.jp/>

<http://www.tulipfair.or.jp>

2001年5月発行